氏　　名	野中　由紀
学位の種類	博士（　コーチング学　）
学位記番号	博甲第　　８７３７　　号
学位授与年月	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	卓球競技の女子カット主戦型選手における競技力の現状と その向上プロセスー世界トップレベル選手の実態をもとにー
主　　査	筑波大学教授 博士（学術）　山田　幸雄
副　　査	筑波大学教授 博士（コーチング学）　佐野　淳
副　　査	筑波大学教授 博士（コーチング学）　會田　宏
副　　査	筑波大学教授 博士（心理学）　坂入　洋右

論文の内容の要旨

野中由紀氏の博士学位論文は、卓球競技におけるカット主戦型選手のゲームの特徴、そして世界のトップ選手になるまでの成長過程について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

<目的>

卓球競技のプレースタイルは、攻撃型であるドライブ主戦型や前陣攻守型と守備型であるカット主戦型が存在する。これまで、攻撃型に関する研究は様々な角度から数多くなされてきたが、守備型であるカット主戦型の研究は、攻撃型に比べて非常に少ないことが指摘されてきた。そして、カット主戦型選手を指導するためのプログラムも提示されず、専任のコーチもほとんど存在しないのが現状である。しかし、オリンピックや世界大会では必ずと言っていいほど、カット主戦型の選手が、上位に入賞しメダルを獲得してきた。その理由を明らかにすることは、カット主戦型選手の育成、あるいは攻撃型選手がとるべき対応策を検討するための貴重な資料になると考えられる。

そこで、著者は、世界トップレベルの女子カット主戦型選手の実際のゲームにおける現状とそのレベルに到達するまでの強化過程を調査し、競技力向上のプロセスを明らかにすることにし、女子カット主戦型選手の指導の普及・発展等に役立つ知見を得ることを目的とした。

<対象と方法>

本研究で著者は、２つの研究課題を設定している。

研究課題１では、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、世界のトップレベル８名の女子カット主戦型選手のゲームの特徴について検討している。

研究課題２では、世界トップレベルのプレーができるようになるまでに、カット主戦型選手はどのような強化過程を経てきたのか、今現在トップレベルで戦うために何を重要視しているのか、カ

ット主戦型にとって何が重要であるかについて、世界ランキング 50 位以内の現役女子カット主戦型選手７名を対象にして、半構造化インタビュー調査を行い、戦型選択の理由、レベルアップのきっかけ及び技術トレーニング等に着目して分析・検討を行っている。

<結果>

研究課題1:分析した試合は、世界選手権、ITTF ワールドツアーの中から1選手当たり6試合、計 48 試合であった。分析項目は、ラリー打球回数、技術の使用率・得点率・失点率等であった。

ラリー平均打球回数は、得点ラリーよりも失点ラリーの方が多かった。そして、３打球目までの得点率が高く、４～９打球目の得点率が低いことが明らかになった。また、攻撃の使用率の平均約８％であり、守備的技術の代表格であるカットとツッツキの合計比率は約 74%であった。攻撃の技術としてフォア反撃ドライブ、バックスマッシュ、フォアスピードドライブ、フォアスマッシュ、バックスピードドライブの５つの技術を使用する傾向が見られた。

研究課題２：分析した項目は、どのような強化過程を経てきたのか、今現在トップレベルで戦うために何を重要視しているのか、カット主戦型選手にとって何が大切であるか等について、明らかに試験等を行った。

戦型選択の初期には、守備型の主要技術であるカットとツッツキの習得とともに、関連した持久力トレーニングが自発的に行われていたことが明らかになった。上位を目指してレベルアップを進める段階において、攻撃技術のトレーニングが追加されてきたことが明らかになった。そして、さらに世界トップレベルに到達し活躍するためには、初期ラリー、ロングラリーという、一見目的が相反するような練習を行っていたことが明らかになった。さらに、世界トップレベルを維持するために、様々な攻撃技術の習得を試みている傾向が認められた。

<考察>

結果に基づいて、著者は以下のように考察を行っている。カット主戦型選手は守備型といわれているが、実際の試合では３打球目までの早い段階で決着がつくことが多く、トップ選手が練習でも取り入れていることと矛盾しないと言える。このことは、カット主戦型の選手でも、ラリーの早い段階で決着がつくような練習を多く取り入れる必要があると考えられた。また、カット主戦型選手の攻撃重視が叫ばれているが、実際のゲームでの平均使用率は８％程度であること、守備的技術であるカットとツッツキが 74%を占めることから、カット主戦型選手は、まず守備的技術をしっかり練習することが必要であると考えられた。その上で、攻撃の技術を習得し、攻撃の幅を広げていくことの必要性が示唆された。さらに、インタビュー調査において、カット主戦型選手の向上のための学習段階が明らかになったことは、今後の選手育成に大きく貢献できるものと考えられた。これらは、卓球競技におけるカット主戦型の研究の発展に寄与するものであり、新たな指導法の可能性を示している研究であるといえる。

審査の結果の要旨

（批評）

著者は、卓球競技におけるカット主戦型について、これまでほとんど明らかにされてこなかったトップ選手のゲームの様相、あるいはトップ選手になるまでの成長過程を様々な角度から明らかにした研究である。カット主戦型選手の育成プログラムの作成、コーチングのあり方に一石を投じ、今後のカット主戦型選手の指導法作りに大きく貢献できる貴重な研究であるといえる。今後はさらに、守備的であるカット主戦型選手の心理的側面、あるいは守備的技術の発展史的側面に光を当て、研究が行われることが期待される。そこから、カット主戦型選手の指導法における一般化がより明確化するのではないかと考えられる。

平 30 年 1 月 30 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。